

協会活動状況

(特別の記事のないものは、すべて会場は事務所において。)

●昭和五十六年五月二十一日(木)

昭和五十四、五十五の両年にわたって実施した委託調査「道々士幌然別湖線環境調査」の報告書を作成するにあたり、委託会社側及び道土木部道路課ならびに帯広土木現業所と本会で、北四条ビルの会議室において取りまとめ方法などについて協議した。

●六月三日(水) 本会よりの出席者 八木、辻井、阿部、進藤。

●六月七日(日)

環境週間記念講演会
道自然保護団体連合の主催により、自治会館ホールにて開催された(内容は会長が別記)。

●六月八、九日(月、火) 前日の講師三氏が標津湿原、尾岱沼、風蓮湖、釧路湿原などを視察し、根室市内でも札幌市と同じく講演会にのぞまれたが、会長が一行に随行した(内容は会長が別記)。

●六月十日(水) 北海道開発コンサルタント(株)より

受託し「室蘭支笏湖間道路事業調査(自然環境現況調査)」を実施することになった。

●六月十七日(水)二十三日(火)

ゼニガタアザラシ写真展

「北海道のゼニガタアザラシ、その生態と保護」というタイトルのもとに、ゼニガタアザラシ保護キャンペーン写真展を、札幌地下街オーロラタウン、展示コーナーで、哺乳類研究グループ、海獣談話会、世界野生生物基金日本委員会などと共催で開催した。

ゼニガタアザラシは、わが国では北海道の東部太平洋岸の一部地域だけに繁殖地をもつ珍らしいもので、海生であるところから一般にはその実態が知られることもなく、絶滅の危機にさらされている。そこで、その保護の必要性についての関心を啓発するために開かれたものであり、多数の客足をとめていた。

●六月二十一日(日)

自然観察会

「ウトナイ湖サンクチュアリ見学会」をテーマとして開催。初夏にふさわしい好天気に恵まれ、野鳥の声を満喫した。

●六月二十三日(火)

常任理事会

出席者 八木、新妻、狩野、大山、長谷川、市川。
主な議題
一、自然歩道条例の制定について
二、滝野国営公園の造成状況について
三、会誌第二一号の発行について

●七月十日(金)

「会誌」編集会議

出席者 八木、新妻、山口
新に編集委員に理事者側として新妻副

会長を加え、第二一号の企画について打合せをした。

●七月十六日(木)

沙流川の巡検

沙流川の採石状況について巡検してほしいという地元の要請により、会長と新妻副会長が巡検した。

●七月二十三日(木)

「会誌」編集会議

出席者 八木、新妻、辻井、山口。
二一号の内容を、「火山」特集とすることに決し、テーマや執筆依頼者、原稿の締切日などについて協議。

●七月二十四日(金)

常任理事会

出席者 八木、門脇、新妻、長谷川、加藤、狩野。
主な議題
一、自然観察指導員講習会について
二、沙流川の巡検について
三、会誌二一号について
四、電源開発(株)の「上熊牛芽室発電所計画に伴う環境調査」の結果について

会社側の関係者が来席し、直接説明。

●八月八日(土)十日(月)

自然観察指導員講習会開催

第二六回北海道自然観察指導員講習会が予定どおり道新羊蹄自然の家を会場とし、道立羊蹄青少年の森をフィールドとして開催した。受講生は、道内七〇、道外三名、女性は一一名であった。

口受託調査事業の報告(つづき)

●知床半島自然生態系総合調査報告書

本調査は昭和五十四年、五十五年の二年にわたって調査されたもので、動物編、植物編にわかれていた。

(動物編)

半島先端部はほとんど人間が近よらないので、原生的自然が残されており、鳥類が豊かで、ヒグマ密度も高く、シカの越冬地もあり、各種中型食肉類も生息している。岩礁はゴマフアザラシとトドの上陸場である。

この半島にはオケツチウシ川、ポンベツ川などサケ、マスが湖上産卵している河川がいくつもあるが、いずれも小さな河川である。これに比べ、ルシヤ川、テッパンベツ川はサケ、マスが湖上するほか、クマ、シカの大獣をはじめとし、各種の哺乳類、鳥類が生息し、オジロワシ、シマフクロウの繁殖地である。湖上する魚類を主要な要素とする食物連鎖、生態系を保全できるのはわが国ではこの地域のみである。

ヒグマについては半島全体で一三五頭が生息すると推定し、先端部の岩だに確認されたハシボソガラスの十三の営巣も国内ではほかに例がない。

一、淡水魚類

スナヤツメ、トミヨ、イトウ、オショロコマ、アメマス、サクラマス、カラフトマス、シロザケ、ワカサギ、ウグイ、イトヨ、エゾハナカシカ、カンキョウカシカ、ウキゴリ、アシシロハゼ、ヌマガレイの八科一六種。

二、鳥類

アビ科三種、カイツブリ科五種、ミズ

ナギドリ目四種、ウ科二種、サギ科三種、ガンカモ一四種、ワシタカ目一八種、キジ目三種、ツル目六種、チドリ目四〇種、ハト科二種、ホトトギス科四種、フクロウ科九種、ヨタカ科一種、アマツバメ科二種、ズツボウソウ目四種、キツツキ科七種、スズメ目九〇種。

三、哺乳類

トガリネズミ科(オオアシトガリネズミ、エゾトガリネズミ、カラフトヒメトガリネズミ、トウキョウトガリネズミ)ウサギ科(エゾユキウサギ)齧歯目(エゾリス、シマリス、エゾモモンガ、エゾアカネズミ、カラフトアカネズミ、ヒメネズミ、ミカドネズミ、エゾヤチネズミ)

食肉目(キタキツネ、エゾタヌキ、フロン、オコジヨ、イイズナ、ホンドイタチ、ミンク、ヒグマ、トド、オットセイ、ゴマフアザラシ、フイリアザラシ、クロカケアザラシ、アゴヒゲアザラシ)シカ科(エゾシカ)鯨目(イシイルカ、ネズミイルカ、ナガスクジラ、マッコウクジラ、コイワシクジラ)

(発行者—北海道、二〇〇頁、写真二二、

図表五六。調査担当—大森可紀之、河村章人、斎藤隆、梶光一、青井俊樹、米田政明、山中正実、近藤憲久、前川光司、森信也、中川元、高橋剛一郎、小宮山英重の各氏)

(植物編)

標高ゼロの海岸線から同一一六〇〇m台の高山まで、植物相は変化にとんでおり、

高山植物、上部広葉樹林、亜寒帯性針葉樹林、針広混交林、下部広葉樹林、ササ類、海浜・海岸植物、湿原など多様な群落広がっている。

◇高山植物

一、高山草原植物群落(尾根筋西斜面にみられる風衝草原、火口原や緩斜面などに発達する雪潤草原植物群落、雪田、雪溪の周辺に発達する雪田植物群落)

二、矮性灌木植物群落(ツガザクラ類、チンクルマ、コケモモ、ミネヤナギ、エゾツツジ、キバナシヤクナゲ、コメバツガザクラ、ミネズオウなどで形成される雪田植物群落や風衝地矮性灌木群落)

三、低木植物群落(ウラジロナナカマド、ウコンウツギ、ハナヒリノキ、エゾクロウスゴなど)

四、ハイマツ群落

◇上部広葉樹林

五、ダケカンバ林
六、ミヤマハンノキ林(ナナカマド、ナガバヤナギ、オガラバナ、イタヤカエデなどを混生する場合もある)

◇亜寒帯性針葉樹林

七、針葉樹林(エゾマツ、アカエゾマツ、トドマツを主体とする)

◇針広混交林

八、針広混交林(ミズナラ、カツラ、シナノキ、ヤチダモ、イタヤカエデ、ハリギリなどを混交している)

◇下部広葉樹林

九、広葉樹林
十、河床林(オオバヤナギ、ドロノキ、ケヤマハンノキ、ヤチダモなど)

◇ササ類

十一、チシマザサ群落
十二、クマイザサ群落
十三、ミヤコザサ群落

◇海浜、海岸植物

十四、海浜植物群落(ハマナス、ハマニシキ、ハマハコベなどの群落)
十五、海浜断崖植物群落(ハマツメクサ、シコタンハコベなどの群落)
十六、海浜断崖上部草原群落(エゾノコギリソウ、アサギリソウなどの群落)

◇湿原

十七、湿原植物群落
◇その他

十八、原野植物群落
十九、高径草本植物群落(オオイトドリ、オオヨモギ、チシマアザミなど)
二十、自然崩壊地、皆伐跡地、耕作地、市街地。

(発行者—北海道、一八〇頁、写真一六、図表一四二。調査担当—鮫島惇一郎、佐藤謙、清水雅男、石塚森吉、鮫島和子の各氏)

口受託調査事業の概要

●室蘭支庁湖間道路事業調査
委託者—北海道開発コンサルタント協

(総事業費 七八五万円)
室蘭—札幌間の道路短縮がネライとされ、上登別から道々、林道を結び、白老奥を通り(一部新設)、湖畔の美笛に至る約三〇kmの道路整備構想に付随した環境調査である(植物—辻井達一氏、動物—大森可紀之氏担当)。

大石元環境庁長官らとの道内自然保護視察

八 木 健 三



さる六月の下旬は環境庁設立十周年を記念する環境週間であった。これを記念した講演会が道自然保護団体連合の主催で、六月七日(日)午後六時~八時半、北海道自治会館ホールで開催され、多数の本会々員も出席した。講師は初代環境庁長官である参議院議員大石武一、自然公園審議会委員中村芳男、日本山岳会自然保護委員長織内信彦の三氏であった。

中村さんは丹沢山中の造林小屋を根拠に青少年を育成する丹沢ホームを作り、ヤマメの養殖に成功するまでの苦労話など、たくみに自然保護の要諦を語った。喉頭ガンを克服してのもの静かなお話しぶりも聴衆に感銘を与えた。

大石さんはないないづくしの環境庁の初代長官として、まず「環境行政とは人の生命を守ることにあり」と規定し、水俣病患者の救済の道をひろげ、また何の権限もない内で、ついに尾瀬を貫通する道路案を撤回させたことなど、環境を守るための苦心をたくみな話術でのべ、大いに聴衆を湧かせた。

織内さんはいかにも山男らしい物静かな語りかけで、山行やレクリエーションの折に自然を守る心がまえを訴えた。

この講演会を機会に、これらの講師と

ともに道内各地の自然保護関係の視察が行われた。すなわち七日には千歳空港に着いた大石さん等を出迎えて、マイクروبスで、日本自然保護協会の金田さん、工藤さん等、地元からは連合の井手会長、田中局長、本会の私などが参加し、日高中央横断道路の建設現場を静内側から視察した。静内川の上流に沿って同道路の予定ルートをさかのぼり、標高二五〇mの北電高見ダムまでゆく。

このあたりは巨大なダムサイドと二本の付け替え道路のために、山肌は無惨に剣ぎとられているが、大石さんもこれには深く感じ入った様子で、「この調子で道路ができれば日高もおしまいだね。こんな所に千億円もかけて道路をつくる必要はどうしてもわからない。結局、利権だけのためということになる」と率直に反対の意見を表明した。

この日はこの視察のあと札幌に直行し、夕食もとらずに前記の講演会を行うというハードスケジュールだった。

翌八日はほぼ同じメンバーで早朝札幌を発ち、千歳空港から女満別空港に飛び、根室自然保護協会の細川さんの出迎えをうけ、ここから道東の視察が始まった。爽やかなカラマツの新緑の上に、残雪に

輝く斜里岳や海別岳が浮かび、まことに快よい初夏の道東ドライブである。小清水を経て斜里町で一休み。ここでは町が行っている知床一〇〇m運動を紹介したところ、大石さんも織内さんも早速加入して下さった。

根北峠を越えるで標津町。ここで「ポ1川歴史と自然の丘」を見学する。これは標津町の北方に曲流しているポ1川の流域の湿原と、その段丘面上のカリカリウス遺跡とを保護してつくられた博物館と自然公園である。湿原の上にはナラの材木の歩道橋が一kmものび、オオバナノエンレイソウ、ニリンソウ、バイケイソウ、ゴゼンタチバナ、ミツバオウレンなどの花が咲き、大石さんは大いに植物学に造詣の深い所を披露した。また、堅穴住居の復原モデルも見事であった。

小さな町でこのような立派な博物館をつくり、天然記念物の湿原を大切に保護しているのに、一同は深い感銘を覚えた。標準の東南には野付岬とそれに抱かれた尾岱沼の入り海があり、ここに春別川が流れこむ。このあたりは不凍のため冬になると白鳥が好物のアマモヤや真水を求めて一万羽も来訪するので有名で、白鳥の碑が建てられている。浅い入海のはとりにほちろん白鳥はいなかったが、どこから飛来したのか二羽のタンチョウヅルが見られた。

これから海岸を走る。いささか霞んでいるため北方領土の国後島は残念ながら見えなかった。別海からは道は西に曲り、風連湖の西方厚床を経て根室市の東

梅に至る。この間には大規模酪農の農場がひろがり、ところどころに巨大なサイロが建っていた。

東海は風連湖(五・二ha)の南端にあたり、流出口にかけられた橋を渡って春国岱まで行くことができる。このあたりはアカエゾマツの純林が所ならず、潮水に侵された部分は立ち枯れて、いわゆるエゾワラの奇観を呈している。坂本直行さん推せんの名勝地だ。まわれ右してオホーツク海を見れば、海岸の砂浜の上には、ハマナスの群落が目にとどく限りつらなる。このエゾマツ林といい、北海道では最大の立派なものだ。また根室保護協会の三浦さん等の説明によると、風連湖には全日本の野鳥の約半数に及ぶ二四〇種もの野鳥が観察され、とくに水鳥が豊富だとのことだ。

ところで驚いたことに、この風連湖の東岸、つまりオホーツク海にのびた赤古丹と春国岱の二つの砂洲を結ぶハイウェイ「望郷ライン」の計画がひそかに進められつつあるという。北方領土問題に関連して、この地域に重点的に予算をつけ、公共事業を行わせるといふネライがあるということだ。このデリケートな砂洲の上に、巨大な鉄とコンクリートの塊りである道路をつくることは、砂洲の破壊にとどまらず、風連湖の貴重な自然を大きく損なってしまうであらう。まさに「亡郷ライン」である。私達一行はこの貴重な自然がどこまでも守らるべきであることを確認しあった。

この八日の夜は根室グランドホテルで

再び講演会が開かれ、熱心な出席者が集まった。この席上、大石さんは春国俗や風連湖の保護をよく訴えられた。そのあと根室の自然保護関係の方々との懇談会は談論風発、楽しい夕べだった。

九日は残念ながら小雨。清隆寺の有名な「千鳥桜」の満開をながめる。桜前線は今やずっと日本の最東端に達したのだ。霧多布へゆき、展望台から雨に煙る琵琶瀬湿原を眺める。それから厚岸を経て釧路へゆく、釧路自然保護協会の土屋さん、札木さんはじめ。大勢の方々が集まり、釧路湿原保護の方策論が行われた。大石さんは国立公園にすべく努力するようすすめられた。

そのあと釧路郷土博物館の方々の案内で、広大な釧路湿原の見学が行われた。展望台からはタンチョウヅルの遊ぶ姿を遠望され、遠くから参加した人びとを喜ばせた。

こうして三日間、駆け足ではあったが北海道各地の自然保護の視察と講演の旅を終え、大石さん等は釧路空港から帰京され、われわれは陸路札幌に戻った。

(会長)

ウトナイ湖サンクチュアリの見学

六月二十一日、快晴に恵まれ、わが国第一号のバードサンクチュアリを見学することができた。

ウトナイ湖に集合した私達は、ゆうゆうと泳ぐコブハクチョウを眺めながら、また、頭の上を、すごい鳴き声をたてて飛んでいくオオシシギに首をひっこめた

りしながら湖畔沿いに歩くこと一・五km、そこに、善意の方々は無償奉仕によって造られたというしよしゃな建物、ネイチャー・センターがあった。

日本野鳥の会吉小牧支部長の紀藤義一さんは、「サンクチュアリとは、野鳥にとつてのカケコミ寺ですよ」とおっしゃったが、まさに名言。野鳥にとつての天国ではなからうか。ここでは二〇〇種類ぐらゐが見られるそうである。

全国九カ所の予定のうち、第一号として出来上つたのがこのサンクチュアリなのだそう、ウトナイ鳥獣保護区として管理されている全域五一・三haの広さをもち、国有地と市有地からなり、三五五・五haのネイチャー・センターや、移動式観察小屋、高床式観察小屋があり、また、嬉しいことに、ネイチャー・センターを基点とした、迷うことのない自然観察路も完備し、ファミリー中心の散策にも申し分のない木立に恵まれた小路である。駐車場も完備している。

常駐のレンジャー安西英明さんも、若さにあふれ、張り切っている。ネイチャー・センターの視聴覚室で、氏からユーモアに満ちた判りやすいスライド説明を拝聴した。高床式観察小屋での紀藤さんのいろいろな鳥の説明、双眼鏡を通しての野鳥は、すぐ目の前である。本当に有意義な、さわやかさが感じられた初夏の一日だった。また、子供達を連れて訪れよう。

(SK生)

ISSN 〇二八五—〇二六五
これは、国立国会図書館がISDS日

本センター(国内センター)という立場から、当協会が発行している「会誌」に与えてくれた「国際標準逐次刊行物番号」であり、逐次刊行物に付与された国際的なコード番号である。しかも、ISDS(国際逐次刊行物データ・システム)という組織のもとで、逐次刊行物の識別や検索に利用されるので、この次の発行(NO二一)から表紙の右肩(予定)に表示するよう指示もされている。

ISSNは、ある逐次刊行物に与えられる固有の番号なので、その発行国、発行者、言語、内容にかかわらず、容易に識別することができるようになっていく。わが国の逐次刊行物をこのように国際登録することによって国際的に普及の機会が与えられるという利点もネライとされている。

自然観察指導員講習会

北海道としては初めての講習会が、予定どおり真狩村の「道新羊蹄自然の家」で開催された。「自然観察指導員」というライセンスも与えられることでもあり、募集と同時に希望者が殺到し、二〇名の多さに達してしまつた。宿泊施設、教科内容などの関係もあり、全員を収容できず、道内七〇、道外三とした。

日程は、八月八日から十日の二泊三日であるが、早朝六時から二時までピシッリという内容で、食時以外には余裕時間も作れないほど講師も受講生も真剣そのものであった。

お知らせコーナー

夏の自然に親しむ会

日時 八月二十三日(日)
集合時間 午前九時四〇分

集合場所 市営バス停 山水園地前(北ノ沢線終点)。

地下鉄真駒内駅前発九時二〇分、市営バス山水園地前行乗車、終点下車。

コース

自然歩道 中ノ沢小・小林峠
山水園地バス停—小林峠—砥石山分岐点—八重別ノ滝(昼食)—中ノ沢入口—北ノ沢会館前バス停(約八・五軒)解散 市営バス 北ノ沢会館前発午後一時四五分の予定。

右に盤溪、左に真駒内を見下ろしながら、眺望みごとな峰歩きと、山道沿いに流れる溪流を楽しめる国有保安林の木立に囲まれた市内でも珍らしいハイキングコース。参加料は無料。講師は久万田敏夫(昆虫、北大農学部)、高畑 滋(植物・林試)の両氏。

昭和五十六年八月一日発行

〇六〇札幌市中央区北一条西七丁目 広井ビル五階

発行所 社団法人北海道自然保護協会

電話 〇二二六—六五八六(代)

〇二二五—四六五(直)

郵便振替口座小樽四〇五五

北海道振興銀行本店〇一七三九

北海道銀行本店〇一四四四

発行人 八 木 健 三
印刷 札幌印刷株式会社